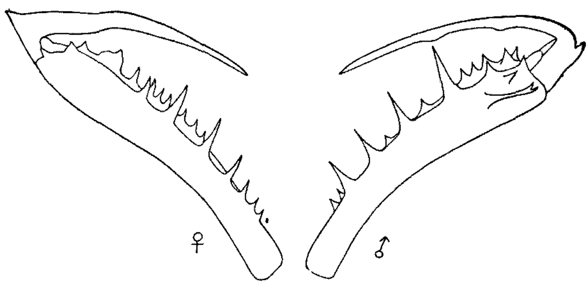
蜘蛛の近似種を簡單に見分ける方法 (I)

植　村　利　夫

東京市瀧野川區西ヶ原町三一〇

(昭和十二年四月十一日受領)

動植物の分類研究をやる人の最も迷はされるのは近似種の見分け方である。同一種だと思つたものに別の名がついて來たり，別種だと思つて同定をもとめたものに同一の名がついて來たりして驚かされ，自分の觀察不十分を考へないで査定者の誤りではないかと疑つたりすることのあるのは誰しも經驗する所である。勿論其の道の權威者だからと云つて其の鑑定は100%間違つてゐないとは限らない。又世間にざらに見受けられるやうに或一種の動物又は植物に對して甲の學者と乙の學者とで全然別な種として取扱はれてゐることもある。この樣な見解の相違は止むを得ないとして，ふとした不注意から査定者の方でもとんだ間違ひをやらかすことのあるのは神ならぬ身の當然のことである。それはさておき，蜘蛛の分類も御同樣に感じておられることでせうが，中々一朝一夕の研究ではてきぱきと種の區別まで出來る樣な簡單なものではない。特に同じ樣な種の區別となつては只一種の決定に數日を費すこともある。否數日どころではない。小生は最近約三箇月間に亘つて *Pachylomerus* 屬の種を比較研究してゐるが，まだどこで區別してよいか見當さへもついてゐない樣な次第である。最近分類なんて學問ではないと云ふ聲をよく聞くが，これは小生の樣なのろまにのみあてはまる言葉ではないかと思ふ。兎に角現代の世の中は忙しいのである。種の區別等も出來れば簡單に早く出來るにこしたことはない。小松榮氏もそうした事を御高著の序文に述べられ，其の點に主力を注いで一生涯の力作「原色大日本蜘蛛類圖説」を著はされた樣であるが，小生も大いに同感の至りである。くだらぬことにペンを辷らしたがさて予はこれから上記の樣な考へのもとに小生獨特の蜘蛛近似種の見分け方を順次御紹介申上たいと思ふ。勿論種の區別は相當深い根據のもとになされてゐるのであつて，只一部分の末梢的な特徴を捕へて種の區別點とするのは學士の喜ばない所と思ふが，小生のこれから書いてみやうとするのはそうした學問的な分類上の特徴を完全に比較するのではない。初歩の方々がごく簡單に時間や勞力を要しないで而も間違ひなく種の區別が出來る樣に最も目立つた或一點又は二點を比較するのであるから，其の特徴たるや分類學上最も重要な點を度外視してゐるかも知れない。それを前以てお斷りしておく。今回は取敢へず最近會員から御質問のあつた種を主として書いて

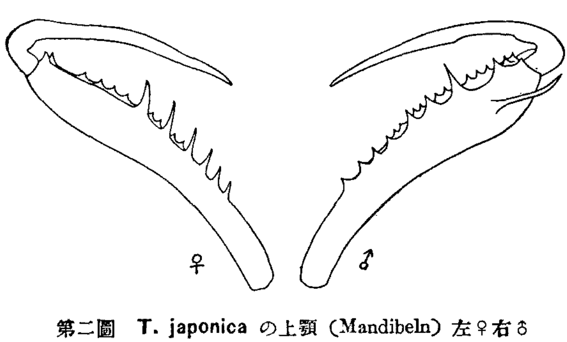


第一圖　T. praedonia の上顎 (Mandibeln) 左♀右♂

みる事にした。今後も御質問のあつたものを中心に書いてゆきたいと思ひますから，どうか御遠慮なく御迷ひになつでおられる點を御通知下さる様お願ひ申上ておきます。（昭和十二年四月十日）

1. アシナガグモ（Tetragnatha praedonia）とヤサガタアシナガグモ（T. japonica）

アシナガグモ（*T. praedonia*）とヤサガタアシナガグモ（*T. japonica*）は完全な成體の標本に於ては大さ，色彩等からはつきり區別出來るものであるが，不完全な標本に於ては容易に區別のつかない場合がある。和名の示す通り *japonica* は *praedonia* に比して體はほつそりしてゐるし，腹部は銀白色に輝いてゐるのであるが，澤山の標本を扱つてみるとこれだけでは見分けのつかないことが多い。そこで最も容易に而も間違ひなく區別する方法として予はこゝに兩種の上顎を比較することをおすゝめする。尤も上顎は最後の脫皮を終へるまでは *Tetragnatha* 獨特のグロテスクなものに發達しないのであるが，その代りに成體でありさへすれば腹部や脚がなくとも區別がつくので都合がよいのである。



第二圖　T. japonica の上顎 (Mandibeln) 左♀右♂

第1圖は *praedonia* 第2圖は *japonica* の上顎を描いたもので，便宜上♀♂を

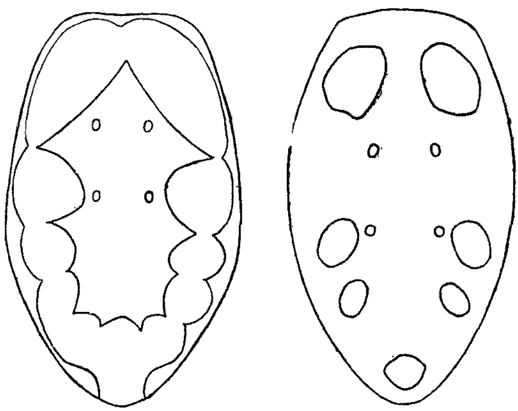
以て一對としておいた。讀者はよく御比較願ひたいと思ふが, *praedonia* の方は牙の基部に♀♂共角があるに反し *japonica* の方は何れも圓曲してゐる點や *praedonia* の♀の後牙堤の先端に近き方に目立つて幅の廣い齒があること等は見逃してならない點だと思ふ。

2. ヤサガタアシナガグモ (T. japonica) とトガリアシナガグモ (T. caudicula)

praedonia と *japonica* の見分け方は上記の通りであるが, 後者に色彩•大さ等の極めてよく似た *Tetragnatha* の一種に *caudicula* と云ふのがある。本種の和名は從來チナガアシナガグモと呼ばれてゐたが, こんど小松榮氏の用ひておられるトガリアシナガグモの方がよい名だと思ふから今後小生もこれを用ひてゆきたいと思ふ。さて此の兩種を區別するには蛛疣の位置を以てすれば一秒も要しないで簡單に片づいて了ふ。即 *japonica* の方は蛛疣は腹部下面の後端に位置してゐるが *caudicula* の方は後端よりもはるかに前方に位置してゐる。そして腹部の先は尖つてゐる。これトガリアシナガグモの和名がついた所以である。日本內地の *Tetragnatha* には上記の外に *lea, niccensis, squamata* 等あるが何れも蛛疣の位置は腹部後端である。細かく分類すると *caudicula* の如く蛛疣の位置が前方にあるものは *Eucta* 屬として扱はれる。臺灣には *Eucta javana* を產する。

3. ヒラタグモ (Uroctea compactilis) とイケダヒラタグモ (U. ikedai)

日本領土內に產する *Uroctea* はこの二種きりである。兩種は細かく比較すれば Epigyne の構造等に多少の相異はあるが, 一見した所極めてよく似た種で, 只腹背の模樣が目立つて異つてゐるのみである。即 *compactilis* の方は腹部背面に大きな菱形の黑色斑紋があつてその周りは白く緣どられて



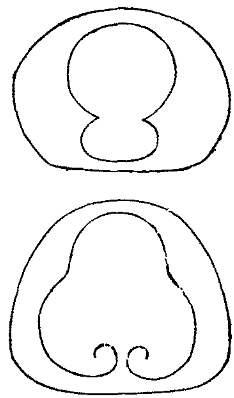
第三圖 **U. compactilis** (左) と **U. ikedai** (右) の腹部 (Abdomen)

ゐるのであるが，後者 *ikedai* の方は腹背全體は少し綠色味のかゝつた黑色で，前者の菱形の黑斑を取りまいてゐた白き部分がこの方では卵形の白色斑紋七個となつて取り殘され他は全部黑くなつてゐるのである。故に *compactilis* の方では腹部背面に大きな菱形の黑い斑紋があると云ふべきを *ikedai* の方では白き卵形の斑紋が七つあると云ふべきなのである。先づこの點だけで區別して大丈夫であると思ふ。因に今までの所 *ikedai* は內地からは見つかつてゐないからもしそれらしきものを御採集になつたならば御通知願ひたいと思ふ。

尙本種の和名にチヨウセンヒラタグモの別名があるが，此の蜘蛛は滿洲•支那方面にも分布してゐるから學名の *ikedai* をそのまゝ和名に用ひた方がよいと思ふ。支那で昔から七星蛛と呼ばれてゐるのはこの蜘蛛の事で，その腹部の斑紋からつけられた名稱である。又齊藤三郎氏は最近本種をタイリクヒラタグモ *U. limbata* として報告せられたが小生はまだその原記載を讀んでゐないからこゝには用ひ慣れた *ikedai* の學名を採用しておいた。

4. クサグモ (Agelena limbata) とコクサグモ (A. opulenta)

クサグモ (*limbata*) はコクサグモ (*opulenta*) よりも早く成熟するし，大いさも前者は體長 15mm. 內外になるに反し後者は 10mm. 位が普通である。これだけでも大體の區別がつくわけであるが，次に腹部下面の斑紋による見分け方を記すことにする。*limbata* も *opulenta* も Epigyne の部分から蛛疣に至る間に褐色の縱線が一本あるのであるが，*limbata* の方は色が淡くその代り幅が大變に廣いに反し，*opulenta* の方は色が濃くその代り幅ははるかに狹い。今少し詳しく云へば前者の褐條の幅が Epigyne の幅の三倍位もあるが，後者は Epigyne の幅と殆ど同大である。これで見分けると非常に簡單であるが最後に最も正確な方法として Epigyne の形を比較しておく。第 4 圖上は *limbata* 下は *opulenta* のそれを描いたものであるが，これも非常に面白いことに前者はダルマをさかさにした樣な形をしてゐるが後者はダルマを立てた樣な格好をしてゐるので記憶に便利なわけである。先づこれだけを

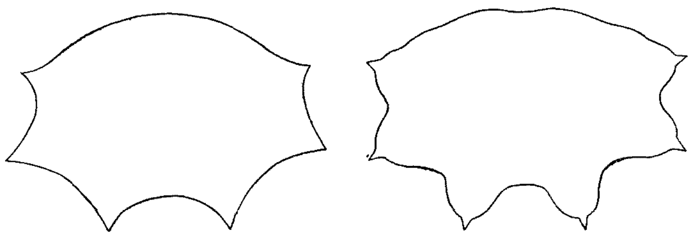


第四圖 **A. limbata** (上) と **A. opulenta** (下) の性域 (Epigyne)

知つておけば十分であらうと思ふ。日本内地に產する *Agelena* には上記二種の他 *ignota*, *labyrinthica*, *japonica*, *tubicola* 等があるが個體數が多くない。

5. トゲグモ (Gasteracantha khulii) とフタホシトゲグモ (G. mammosa)

日本領土内でも臺灣へ行けば *Gasteracantha* の種類が多いが，内地では *khulii* と *mammosa* の二種きりである。故に先づ内地の方はこの二種の區別點をよく知つておけば採集した時にすぐ區別がつくわけである。それは極めて簡單なことで，第7圖と第8圖を比較して下さればわかる樣に *khulii* の方の腹部の突起は只單なる突起であるに反し *mammosa* の方は夫々の突起は皆臺の上

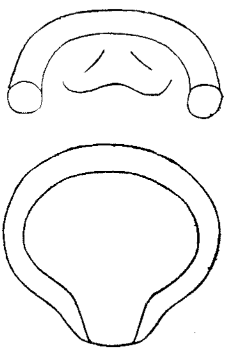


第五圖 G. khulii (左) と G. mammosa (右) の腹部 (Abdomen)

にあることである。即一旦ふくらみがあつて其の上に棘が出ておれば *mammosa* の方で，臺がなければ *khulii* であると御決定になつてよいわけである。*khulii* は廣く關東地方まで分布してゐるが *mammosa* は今の所近畿地方までしか知られてゐないと思ふ。何れにしても本屬の蜘蛛は全部南方系のものである。細分式の分類に於ては *mammosa* は *Tholacantha* と云ふ屬に入れられる。臺灣には *khulii* によく似て更に棘の長い *Pochypleuracantha sautori* を產し，更に齋藤三郎氏は最近クロオビトゲグモ (*G. sola*), ブチトゲグモ (*G. sparsa*), タイワントゲグモ (*G. formosana*) の三新種を報告した。尙齋藤氏は *mammosa* の學名に *G. brevispina* を用ひておられるし, *khulii* の學名に *G. leucomelas* を用ひる人も相當にあるから注意を要する。

6. アシナガコマチグモ (Chiracanthium eutittha) とカバキコマチグモ (C. japonicum)

ハヘトリグモとドクグモは最も種の鑑別に困難な類であるが, *Chiracanthium* の如きもそれに次ぐものではないかと思ふ。日本産の同屬も約十種知られてゐるが何れも成熟するまではどうしても見分けがつかない。否成熟しても本當によく似たものである。例へば *C. lascivum* は隨分各地から産することは報告されてゐるが, これの♂と *japonicum* の♂とは觸肢の構造と云ひ其の他に於ても實によく似てゐる。最近小生の精密な調査の結果によると中部・關東・奥羽の各地方から北海道にかけて最も多いのは *lascivum* でなくて *japonicum* であつた。勿論今までの報告は間違つてゐるかゐないかは小生の知る範圍ではないが, 現在までに最も多く予に送られて來た標本は殆ど *japonicum* であつたことを明記しておく次第である。それはさておきこゝには先づ *eutittha* と *japonicum* の二種のみに就て區別點をあげ, 何れ又多くの同屬に就て比較研究をしてみたいと思ふ。

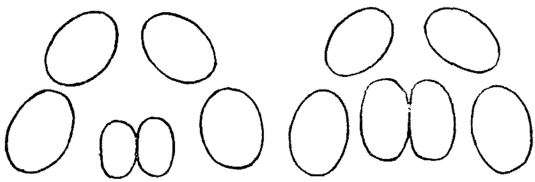


第六圖　C. eutittha (上) と C. japonicum (下) の性域 (Epigyne)

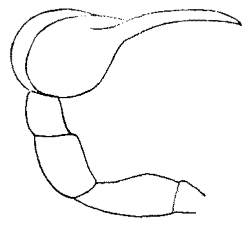
さて *eutittha* の方は原記載に Fundort unbekant と出てゐるが, 本種は矢張九州方面に産するものらしく最近予は王寺幸寛氏より完全な♀成體の標本を貰ひ受けた。此の種は一見して驚くことは步脚の極めて長いことである。測定の結果體長 12 mm. に對して第一步脚の如きは實に 34 mm. もあり體長の約三倍に達してゐる。元來 *Chiracanthium* は第一步脚の長い點で *Clubiona* と區別されるのであるが, 長いと云つても普通の種では大低體長の二倍位のものである。例へば *japonicum* の測定の結果は體長 10 mm. に對して丁度二倍の 20 mm. であつた。三倍もあるのは恐らく本種だけではないかと思ふ。この點で予は今回 *eutittha* にアシナガコマチグモの新稱を附することにした。更に兩者の區別點をあげると *eutittha* の胸板は赤く *japonica* の胸板は體と同樣樺黄色である。最後に愈々これらの種に間違ひなきかを確めるために兩種の Epigyne の形を圖示しておいた。第6圖上は前者下は後者であるからよく御比較願ひたい。尚♂の見分け方は後日にゆづることにする。因に日本産 *Chiracanthium* 屬の蜘蛛で主なるものは上に出て來た三種の他に *digitivorum*, *kompiricola*, *unicum* 等あり, 關東地方には岸田久吉氏の命名したエドコマチグモ (*C. rubicundulum*) が普通である。

7. ダニグモ (Gamasomorpha cataphracta) とウスイロダニグモ (G. karschi)

體長2mm.内外にしか達しない小形な蜘蛛で樹皮の間等に生活し，而も腹部の上面と下面には鎧を着た樣に厚い甲を持つた六眼の種に *Gamasomorpha* と呼ぶものが内地に三種棲んで居り，東京市内でも二種を見出すことが出來，冬期成熟して居る。其の一を *cataphracta* と云ひ他を *karschi* と呼ぶ。*cataphracta* とは鎧を着たと云ふ意味である。此の兩種は和名の示す通り色彩に多少の差があつて *karschi* の方が淡いことは淡いがこれだけで比較することは大なる危險である。そこでもつと詳しく調べると蛛疣の位置 Epigyne の構造等も違つてゐるが，小生はこゝに眼の配置と大さによつて見分ける方法を御紹介申上たいと思ふ。第7圖左は *cataphracta*, 右圖は *karchi* の單眼の並び方を圖示したものであるが，これは兩者とも頭部の斜上方から全部の眼が見えるやうにして描いたのであるから此の點を注意して御覽願ひたいと思ふ。尙餘談ではあるが蜘蛛の眼を觀察する時は必ず上記の如くするのが必要條件であつて，これを間違へると間眼の内曲か外曲かも違つてくる場合が多いわけである。尙圖に描く時にも前列眼を上にして描く學者と後列眼を上にして描く學者とあるが，何れにしても一つの著書論文に於ては一定しておくことが讀者に對して親切と云ふものである。でないと前列眼と後列眼をとり違へてとんでもない間違ひを來すことがある。大體に獨逸の學者は後列眼を上にして描



第七圖 G. cataphracta (左) と G.karschi (右) の眼の配置 (Augenstellung)



第八圖 G. karschi の觸肢 (Taster)

く。小生の此處に掲げた圖は前列眼を上にして描いたものである。さて話は又元にかへるが，此の兩圖をよく比較するとすぐ氣づくことは，前者卽 *cataphracta* の後列中眼は側眼に比して大さは非常に劣つてゐるが後者卽 *karschi* の方は四眼共殆ど同大であることである。この點をよく呑みこんで顯微鏡を覗けば難なくその何れなるかを決定出來ると思ふ。

又前者の後列眼は後曲してゐるに反し，後者のそれは前曲してゐるやうにも見える。これは分類學上重視すべきことで，これだけの差異があれば別屬として扱はるべきものであるが，小生の見誤りであるかも知れないから後日の再研究にゆづることにする。

尙♂の方は第8圖の如く觸肢の先が長く細くのびてゐるのが *cataphracta*で，先が丸く尖つてゐないのが *karschi* であるからこれ又すぐに見分けがつくわけである。

3. シモフリタナグモ (Tegenaria corasides) とシモフリイホグモ (Coras insidiosus)

シモフリタナグモは一名カキネグモとも云はれてゐる。後者の和名を用ひておられるのは小松敏宏氏で，誰が初めて用ひた和名かは小生はまだ調べたことがないが，同縣の蜘蛛を初めて研究された金子光司氏の在信州時代から用ひられてゐたのではないかと思つてゐる。小松榮氏は本種に對してメガネタナグモなる和名を用ひておられるが，多分これは新稱ではないかと思ふ。以上三つの和名の中小生は小松敏宏氏の用ひるカキネグモは最もよい名だと思つてゐるが，こゝには從來通りシモフリタナグモを用ひておいた。小松敏宏氏は又本種の學名を *Coras corasides* としておられるが，これに就ては小生は矢張り *Tegenaria* に入れる方が正しいと思つてゐる。而し實際實物にあたつてみるとこの蜘蛛は *Tegenaria* の方よりもむしろ *Coras* の方に近い感じがする。元來 *Tegenaria* と *Coras* は直眼の大さによつて區別されてゐるのである。卽直眼が第一間眼よりも目立つて大きいのが *Coras* で，直眼と第一間眼とが殆ど同大の場合は *Tegenaria* とされるのである。そこで *corasides* であるが，此の蜘蛛は大體の形は *Coras* に似てゐるが，眼の大さは矢張り *Tegenaria* の方に近い。故に命名者も *Coras* に似た *Tegenaria* と云ふ意味で *Tegenaria corasides* なる學名をつけたのではないかと思ふ。話は大分本筋を離れてしまつたが，これで *Coras* と *Tegenaria* の區別がお分りになつた事と思ふ。從つて又和名はよく似てゐるが *T. corasides* と *C. insidiosus* とは全然別なものである事もおわかりになつたわけである。而して *corasides* は到る所の垣根・古木の樹皮下等に極めて普通な種であるが，これに似た種類は *Tegenaria*, *Coras* 其他近似の屬に數十種もあつて，一見しての區別は中々

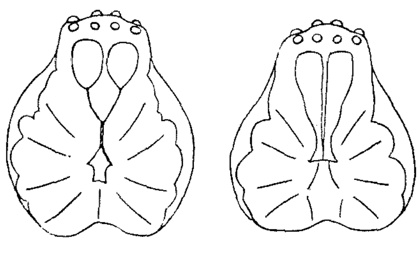
面倒なものである。勿論こゝでは全ての種を比較することが出來ないから，*T. corasides* を其の近似種と見分ける方法として同種の Epigyne の構造を圖示しておく。此の Epigyne の形は肉眼にても明瞭に見ることが出來るものであるから直ちに本種であるか否かを知り得るわけである。因に本邦產 *Tegenaria* 屬の主なるものは *corasides* の他に *curta, dia, Derhami, muscicapa* 等であり，*Coras* 屬の主なものには *insidiosus* の他に *luctuosus, plancyi* 等がある。



第九圖　T. corasides の性域（Epigyne）

タニガハドヨウグモ（Meta yunohamensis）とタニマノドヨウグモ（M. kompirensis）

Meta yunohamensis の和名に從來ユノハマドヨウグモ，*M. kompirensis* の和名にコンピラドヨウグモが用ひられてゐたが，どちらも一地方特產を意味するやうなきらひがあるので，小生はこゝに小松榮氏の用ひておられるタニガハドヨウグモと，片桐三樹氏の用ひておられるタニマノドヨウグモを夫々用ひることにする。而し兩者はあまりにもよく似た間違ひ易い名稱であると思ふので，後者に對しては何時か適當な和名につけ改めたいと思つてゐる。さて此の兩種は極めてよく似た種で，習性も全然同一であり，Epigyne の構造も酷似してをり，腹部の斑紋の如き全然同一の場合がある。そこで此の兩種を見分ける最も重要な點をあげると，先づ第一は *kompirensis* の方が *yunohamensis* よりも步脚が長い點であり，第二は背甲主として頭部の斑紋に差異のあることである。この内第二の方法で見分けるのは最も手つとり早いのである。卽眼域（Augen）のすぐ後方に於て黑褐色の斑紋が第10圖左の如く眼鏡狀になつてゐるのは *yunohamensis* で，*kompirensis* の方は予のみた範圍では常に同圖右の如く中央に縱の白い線が

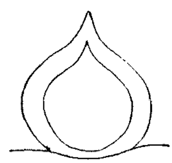


第十圖　M. yunohamensis（左）と M. compirensis（右）の頭胸部（Cepharothorax）

あるだけで，決して眼鏡状にはなつてゐなかつた。腹部の模樣は前記の如く全然同一の場合があるから餘程注意しないと間違ひをおこす種であると思ふ。邦產 Meta 屬の蜘蛛は上記二種の他に *doenitzi, reticulata=segmentata, vena* 等あるが，この中 *vena* は命名者 Doenitz 及 Strand 兩氏も疑つておられる通り，間違ひなく *kompirensis* の無斑型につけられた名稱であると思ふ。小松榮氏は *vena* にヤマドヨウグモなる和名を附して採用されてゐるが，*kompirensis=vena* であるとすれば前者の學名を用ひる方が正しいのである。何れこの問題に就ては稿を改めて論議したいと思つつゐる。

10. イワウイロハシリグモ (Dolomedes sulfureus) とスヂチヤハシリグモ (D. fimbriatoides)

誰しもおつしやられる如く *Dolomedes* 屬の種の區別は確かにむづかしいものである。特に *sulfureus* と *fimbriatoides* の如きは極めてよく似たものである。從來黃色つぽい *Dolomedes* の幼蛛又は subadult は大抵 *sulfureus* だらうと思つてその樣に同定した場合が多かつたのであるが，最近はどうもその中に *fimbriatoides* が相當多數混入してゐたのではないかと思はれて來た。スヂボソハシリグモの幼蛛も時に *sulfureus* の如く無斑型の場合があるのであるが大抵の場合は腹背の黑條が目立つてゐるから先づ誤ることが少いと思ふが，*sulfureus* と *fimbriatoides* とは常に黑條を缺いてゐるから幼蛛に於ては殆ど區別のつかないものである。さて此の兩種の差異點であるが，成體に於ては前者の方が後者よりもはるかに大形であるし又色が濃くて濃褐色であるが，後者の方は色が淡く先づ黃色に近い方で，大して大きくはならない。亦腹背に模樣が多いのは *fimbriatoides* で *sulfureus* の方は多くの場合斑紋が明らかでない。而し兩種は酷似した種であるからその何れか一方をはつきり見分ける方法を知つておくべきである。それがためこゝには *sulfureus* の Epigyne の圖を揭げておいた。こんな簡單なハート形の Epigyne を持つてゐるのは *sulfureus* であるから大變覺えるのに都合がよいわけである。尙序乍ら本邦產の *Dolomedes* には上記二種の他に *angustivirgatus, pallitarsis, hercules, japonicus, oviger, raptor, saganus* 等がある。これ等の各種に就ての區別は本誌 Vol. 1, No. 4 に揭載の岸田久吉氏「日本帝國產ハシリグモ屬諸種に就て」を御覽下されば大體おわかりになることゝ思ふ。



第十一圖 **D. sulfureus** の性域 (Epigyne)